

～置賜の大王が眠る～ いなりもりこふん 稲荷森古墳

国指定史跡

今から千七百年前、置賜地方は古墳時代に入ります。古墳時代は、邪馬台国女王「卑弥呼」ひみこのお墓が造られた頃から始まりますが、それから数十年後のことです。幾何学的な文様を持つ弥生土器に代わって、文様を持たない土師器はじきを使い、鉄の武器や道具を使用する、優れた土木技術を有する古墳文化が伝わり新しい時代に入ったのです。

弥生時代より一段と優れた農業後術はたちまちに普及し、宮内扇状地には数多くのムラができ、その指導者は王となりました。田園風景が広がるに連れて米沢盆地は古墳文化北限地域でも有数の米どころになりました。宮内扇状地や周辺の村々の王の頂点に立つ大王が誕生しました。そのお墓が稲荷森古墳です。

稲荷森古墳は、赤湯の長岡地区にあります。一千万年ほど前の火山性陥没で、宮内南部～沖郷地区東部～赤湯地区東部が大きな谷地になりましたが、その時も陥没しなかった長岡山丘陵の南西を利用して築かれた東北有数規模の前方後円墳です。

全長 96m、前端幅 30m×長さ 34m×高さ 4mの前方部と、三段重ねの餅のような直径 62m×高さ 9.6mの後円部が繋がって、空から見ると江戸時代の女性が愛用した柄鏡えかがみのようです。堂々として古式ゆかしい大規模な前方後円墳です。

古墳の埋葬施設は国の指示で発掘していませんが、盛土はバームクーヘン状に粘土と土を交互に突き固めた版築はんちくで崩れないようにしてあり、祀りに用いた底に孔のあいた底部穿孔ていぶせんこうの壺や、お供え物を盛る高杯たかつきが発見されています。

隣の長岡山丘陵からは大王に仕えた人々、特に上位の人々の、四周を溝で区画した方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼや、祀りの土器・鉄の刀・斧なども発見されています。

「北に丘陵、南に沃野」の沃野を拓いた先祖の大指揮官の眠る稲荷森古墳公園には数多くの人々が訪れ、市内でも一大観光スポットになっています。

南陽市文化財保護審議委員 佐藤鎮雄

平成 25 年 5 月 1 日号 市報なんよう掲載



▲稲荷森古墳から出土された土器